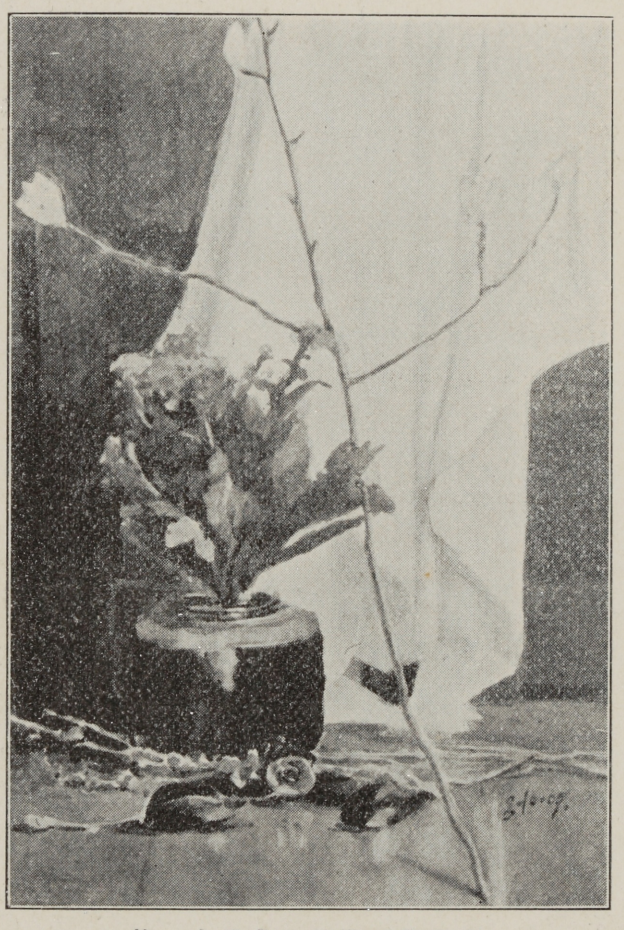
△次にまた、氏が古畫に對する觀察が面白い。氏の言はるゝには、古畫は甚だ解し惡い、初めのうちは面白くなく思つた、然し諸國を巡つて澤山見てゆくうちに、漸く其味を解し得て、今では古大家の繪に對して多大の尊敬を拂ふやうになつた。

▽而して、如何にして古畫が解し得られしかといふに、假令ば先初めに知らぬ人に逢へば、其人のホクロとかアザとか、一番眼につく、そして髯があつたとか、眉が太かつた位でよく其人は解らない。次に逢へば、顏や姿の大體の輪廓がわかり、追々懇意になるに從つて、齒の缺けたのも分る、いろ〳〵な癖も分る、進んでは心持迄も分るものである。

▽さて其人の心持迄も分るやうに親しくなれば、最初に眼についたホクロや眉は最早眼中にない、多少の癖も氣にならぬ、只々其人の精神を知る許りである。

▽古畫に對するのもこれと同樣であつた、初めは眞黑だとか穢ないとか思つて見てゐるうちに、段々繪のうちの美所が解し得るやうになり、終には其繪を描いた畫家の精神迄も想像さるゝやうになつて仕舞ふ。

▽隨つて、初めに黑いとか穢いとか思つた點は、いつか忘れて形態の上の醜い處などは少しも心に留まらなくなる、そして後には、其畫家の精神に迄立入つて、美しい感情に同化されて仕舞ふのであると。



水彩畫研究所三月例會一等
赤城恭舒筆

▽實に氏の如きは、眞に美術を愛する人である。世に紳士といはるゝ人々よ、希くは自ら畫くを能はざるも、氏の如く美術の味ふを得る人になつて頂きたい。

＊　＊　＊

○　天然は一日も之を忽にすべからずと雖も或る時期に達したる後畫人は天然に拘束せられざるを要す

○　美術界にて畫人は尤も好遇され又最も良き報酬を受くるものなれども常に尤も不平多きは畫人なりとす